

世界農業遺産の認定に係る申請書概要

森・里・湖に育まれる 漁業と農業が織りなす「琵琶湖システム」



産卵のため水田に遡上するフナ(右上)と、朝もやの中で行われるエリ漁



エリ漁に関する裁定について記した 13 世紀の古文書



エリ漁の様子を描いた 19 世紀の古絵図

琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会

2019 年 10 月

概要情報

農林水産業システムの名称

森・^{うみ}里・湖に育まれる 漁業と農業が織りなす琵琶湖システム

申請団体

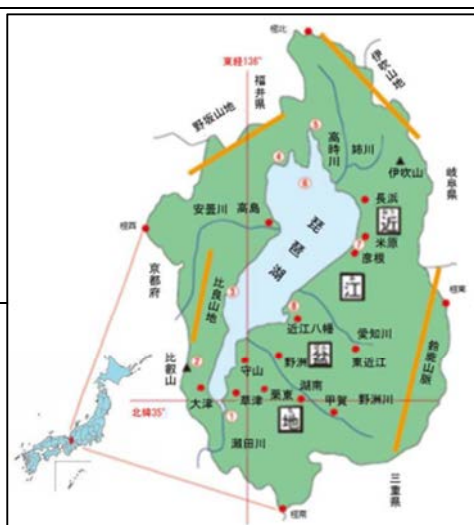
- ・団体名：琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会
- ・組織構成：滋賀県漁業協同組合連合会、滋賀県農業協同組合中央会、滋賀県土地改良事業団体連合会、滋賀県森林組合連合会、一般社団法人滋賀県畜産振興協会、公益社団法人びわこビジターズビューロー、滋賀県青年農業者クラブ連絡協議会、琵琶湖とつながる生きもの田んぼ物語推進協議会、大津市、彦根市、長浜市、近江八幡市、草津市、守山市、栗東市、甲賀市、野洲市、湖南市、高島市、東近江市、米原市、日野町、竜王町、愛荘町、豊郷町、甲良町、多賀町、滋賀県（その他 団体95団体、個人572名）

所管省庁

農林水産省

申請地域の位置

- ・申請地域名：滋賀県琵琶湖地域
- ・申請地域の位置に関する説明：
日本列島の中央部に位置する近江盆地
- ・地理座標：北緯 34°47'-35°42' 東経 135°46'-136°27'



主要都市から申請地域までのアクセス

(鉄道) 東京駅から約2時間15分

(東海道新幹線で米原駅まで)

京都駅から約10分(JR線で大津駅まで)

新大阪駅から約35分(JR線で大津駅まで)

(空路) 伊丹空港(大阪)から約1時間30分(新大阪駅経由 JR線で大津駅まで)

関西空港(大阪)から約1時間45分(新大阪駅経由 JR線で大津駅まで)

面積

計1,181km²(琵琶湖670km²、農地342km²、森林169km²)

農業生態学的分類

森林と水田に取り囲まれた温帯域の湖沼での内水面漁業

地形的特徴

1,000mを超える山脈に囲まれた盆地内の中心に日本最大の湖を有し、その辺縁部に農地・森林が形作られている。

気候区分

夏期は高温多雨で多湿、冬期は例年数度の降雪がある。平均気温は約15℃、平均年間降水量は約1,570mm(彦根地方气象台)で、温暖湿潤気候に属する。

人口(うち受益者)

計29,240人(漁業者約680人(琵琶湖漁業)、農業者等約26,550人(環境こだわり農業)、林業者等約2,010人(水源林保全))

民族/先住民の人口

該当なし

主な生計源

漁業及び農業

農林水産業システムの概要

琵琶湖システムは、水田営農と深く関わりながら発展してきた伝統的な内水面漁業を中心とするシステムである。その根幹には、産卵にやってくる湖魚に安全な繁殖場を提供する水田営農、必要な量・サイズの湖魚のみを選択的に漁獲する伝統的な漁法、漁業者が組織的に水産資源を保全管理する伝統的で社会的な仕組みがある。農業と漁業の複合的な営みにより、1,000年以上にわたって受け継がれてきたシステムで、都市化が進む地域の淡水域において、持続的な資源利用を受け継いできている。

日本の古都・京都の近傍に位置する琵琶湖は、16の固有種を含む47種の在来魚を育んできている。この中で、ニゴロブナ等の湖魚は、約2千年にわたり、湖辺の低湿地に開発された水田に自ら遡上し、産卵・初期成育の場として利用してきている。こうした中、人々は、遡上する湖魚を農作業の傍らで捕獲する様々な待ち受け型の漁法を発達させ、食料自給の安定性を高める半農半漁のライフスタイルを築いた。

漁法の代表格は、未成熟魚を捕らえない、選択的な漁獲が可能なエリ漁である。エリとは水流や魚の生態を巧みに利用する伝統的な定置網で、このエリは水田とともに、持続的な資源の利用と保全の実現する「里湖(さとうみ)」と呼ばれるランドスケープ・レイクスケープを形作ってきている。漁業者はこうした中で、水産資源を保全管理する仕組みを築いてきた。また、人々は、湖辺のヨシの利用・保全や水を大切に暮らすを営み、さらに水源林の保全も進めてきた。

こうした営みの背景には、多様な湖魚を米で発酵させるナレズシの食文化がある。その代表であるフナズシは、日本の寿司の原型と評されるだけでなく、祭礼の供え物等にも用いられてきている。これらは、人びとの絆を醸成し、自然災害等の困難に協力して対処する上で精神文化的基盤となってきた。

20世紀後半の経済発展の中で、このシステムは、人口増や都市化、農業の近代化、外来魚による食害など、様々な課題に直面してきた。こうした課題に対し、1970年代以降、漁業者のみならず、農業者や消費者など多様な主体が連携し、琵琶湖システムの継承に取り組んできている。そのような中で、琵琶湖の富栄養化防止に向けた市民運動により条例が制定され、湖魚が産卵できる水田・水路の環境を保全する取組も行っている。

こうした多様な主体の協働は、ソーシャル・キャピタルの形成にもつながり、それが、下流の大都市圏の住民を含む1,450万人の水源である琵琶湖の水質や生態系の保全にも寄与している。

当地域は、さらに、地球上の水の0.5%以下と言われる利用可能な淡水資源の保全に向け、学術研究を進めるとともに、国際会議の開催や、研修の受け入れ等を行っている。これらの努力は、まさに、経済、社会、環境の調和を目指す取組であり、国連が定めた「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成にも貢献するものである。

森・里・湖に育まれる
漁業と農業が織りなす琵琶湖システム

申請概要

伝統的な内水面漁業を中心とするシステム
 (水田営農に支えられながら発展し、千年にわたって継承)

《水産資源の再生産に寄与する水田営農》

- ・湖魚が自ら水田にやってきて産卵
- ・仔稚魚は高い生残率で急激に成長
- ・生物多様性の保全にも寄与

《資源に優しい伝統漁法》

- ・必要な量・サイズの魚のみ選択して漁獲 (未成熟魚は逃がす仕組み)
- ・待ち受け型で、農作業の傍らで操業可能



湖魚の水田への遡上

《水産資源を保全する伝統的で社会的な仕組み》

- ・漁業者が自らルールを作り、それを実践
- ・資源保全の歴史を13世紀まで辿れる文献が残存



エリ漁



エリ漁に関する古文書(1241年)



・米で魚を発酵保存する食文化
 ・これを用いた祭礼
 ⇒社会的仕組みの基盤となる人々の絆の醸成に寄与



伝統食フナズシ



フナズシを捧げる神事

【世界的な重要性】～淡水域における伝統的で持続的な資源利用～

歴史的重要性

- 資源の利用と再生産の循環を実現する“里湖(さとうみ)”と呼ばれる特徴的なランド/レイクスケープを現代に継承。次の営みはその中心的な要素であり、歴史的文献も豊富に残存。
 - ①必要な魚のみを生け捕りできる伝統的な漁業技術
 - ②漁業者自身による伝統的で社会的な水産資源保全の仕組み
 - ③湖魚に産卵場を提供する伝統的な水田営農



多彩な琵琶湖の恵み

現代的重要性

- 都市化の中でも、農業者や消費者が連携。集水域全体で水質・生態系を保全する仕組み作りを進め、内水面漁業と農業を両立・継承。
- 学術研究、国際貢献を進めながら、1,450万人の水源も保全。



市民参加による水田での生態系保全



国際会議の創設

⇒開発や乱獲等により、世界の内水面漁業が危機に瀕する中、琵琶湖システムはSDGsの達成にも貢献できる存在

